

黙示録8章「神のラッパ」

1A 祭壇の火 1-5

1B 半時間ばかりの静けさ 1-2

2B 金の香壇 3-5

2A 投げ込まれた香炉 6-13

1B 三分の一の破滅 6-12

1C 地 6-7

2C 海 8-9

3C 川 10-11

4C 天 12

2B なお三つのわざわい 13

本文

黙示録8章を開いてください。私たちは6章から、小羊なるイエス様が、七つの封印を解かれるところを読んでいます。それが全地に対する神の購入証書であり、世界をキリストにあってご自分のものとする、その所有権を行使することであることを学んでいます。今、私たちは神によって贖われていない世界を見ています。地上に不法がはびこり、罪が増し加わり、曲げられた世に生きています。そこで、キリストによって罪が取り除かれ、悔い改めることによって魂を贖っていただいたキリスト者がいるのです。ペテロは、悔い改めたユダヤ人たちに対して、「この曲がった時代から救われなさい。(使徒 2:40)」と言いました。そして、封印を解くことによって主は福音による救いを受け入れない世界に対して裁きを行われています。

私たちが6章以降で災いを見ている時に、それはただ恐ろしいことが起こっていると見てはいけません。私たちがキリストの十字架の苦しみを見る時に、それが惨たらしい暴力の映像のようには見えていません。聖なる、正しい神が、私たちに代わってご自身の御子に罪を負わせている愛のお姿を見ているのです。同じように、主が世界に災いを下される時に、そこには神の正しさと聖さに現れであり、福音を拒む頑なさに対する裁きであることを見ます。6章は、第一の封印が解かれると白い馬が出て来ますが、それは偽の平和の使者であり、偽キリストの出現であります。福音の真理を拒むので、偽りを信じるままにされるように神がなされるのです。キリストこそが平和であり、この方であれば全ての災いの元である罪を取り除くことができないのに、この方以外のものによって平和を成し遂げようとする

教会は神の怒りから免れるために、主ご自身が天から降りてこられて、教会が空中にまで引き上げられてそこで主に会います。そして19章において、小羊との婚姻に結ばれている教会の姿を

見ます。だからといって、主はご自分の救いを患難の時にあきらめておられるのではありません。主は、イスラエルの救いを始められます。初穂として、イスラエル 12 部族から成る 14 万 4 千人の額に、印を押すことによって災いの中にも守られるようにしていただきます。そして、おそらく彼らの福音宣教の働きにより、世界の国々から信仰のゆえに殉教して、小羊の血によって洗われて白い衣を着ている大群衆が、天において小羊による救いを喜び、賛美しているのです。

そして、7 章において、四人の御使いが、地の四隅に立っていたことを思い出してください。それは、「地の四方の風を堅く押さえ、地にも海にもどんな木にも、吹きつけないようにしていた。(1 節)」とありました。印を額に押してしまった今、8 章では、主は第七の封印を解かれることによって、地や海に災いが下るようにされます。

1A 祭壇の火 1-5

1B 半時間ばかりの静けさ 1-2

1 小羊が第七の封印を解いたとき、天に半時間ばかり静けさがあった。2 それから私は、神の御前に立つ七人の御使いを見た。彼らに七つのラツパが与えられた。

ついに、「第七の封印」を小羊が解かれました。これが最後の封印ですから、これで世は神のもの、キリストのものになると思いきや、その第七の封印の中にさらに七つのラツパによる災いがあるのです。私たちはここで、黙示録を、旧約聖書を含めた、神の一貫したご計画の中で眺める必要があります。主は、その聖なるご性質からカナン人を聖絶しなさいという命令をお与えになりました。ヨシュア率いるイスラエル人は、ヨルダン川を渡河した後にすぐに出て来るエリコの町を包囲しました。しかし、それはまるで軍事作戦とは呼べないお粗末なものでした。一日に、その城壁の周りを一周しなさいと言うものなのです。七人の祭司が雄羊の角笛をもって、吹き鳴らします。その後、契約の箱を担ぐレビ人が続きます。その前後に、すなわちラツパを吹き鳴らす祭司の前と、神の箱の後に、武装したイスラエル人が進みます。それを一日に一周行ないます。

そしてそれを六日の間、行なうのです。そして七日目になると、彼らは同じ仕方で七度回ります。そして、祭司たちは角笛を吹き鳴らして、民が大声でときの声を上げると城壁が崩れ落ちたというものです。これから私たちは、七人の御使いがラツパを吹き鳴らすところを見ます。そして、11 章 19 節には、天における神殿の中に契約の箱が見えます。神が、ご自分の聖なる所からの裁きを行われる時に、ラツパの吹き鳴らす音をもって行なわれ、そして、第七日目に七週回ると同じように、第七の封印を解けば、七つのラツパがあります。レビ記 26 章には、イスラエルの民が悔い改めない、さらに七倍にして懲らしめると書かれており、これは、神の裁きの度合いがさらに強められることを意味しているでしょう。

第七の封印が解かれると、「天に半時間ばかり静けさがあった。」とあります。これは、4 章以降、

天において四つの生き物や二十四人の長老、そして無数の御使いが大声で主を礼拝し、賛美し、殉教した大勢の聖徒たちが喜びの声を上げている中で、全くの静けさが起こりました。静かであるということが、主なる神がこれから行われることを畏怖の念で見つめていることを伺わせます。ゼカリヤ書 2 章の最後には、「すべての肉なる者よ。主の前で静まれ。主が立ち上がって、その聖なる住まいから来られるからだ。」とあります。

そして「ラツパ」そのものでありますが、聖書では、雄羊の角によって造られる「角笛(ショーファー)」があります。また民数記 10 章には銀によって造られたラツパも出てきます。そして角笛は、金属音ではなく、象の鳴き声に少し似ています。これを使って、イスラエルは、イスラエルに呼びかける音として用いていました。また、ダビデが神殿建設を指導してからは、礼拝の中で、琴やタンバリンやシンバルとともに、角笛が楽器の一つとして用いられています(詩篇 150 篇など)。

イスラエル人たちに十戒をお語りになるために、シナイ山に主が降りて来られたときのことを思い出してください。「三日目の朝になると、山の上に雷といなずまと密雲があり、角笛の音が非常に高く鳴り響いたので、宿営の中の民はみな震え上がった。(出エジプト記 19:16)」聖なる主が来られるときに、雷といなずまと密雲があり、角笛も非常に高く鳴り響きます。おそらく、これは主とともにやって来た御使いたちが吹き鳴らす角笛の音であったのでしょう。ステパノが、モーセの律法は、御使いによって定められたと言っています(使徒 7:53)。ですから、七人の御使いが聖なる神の御座から、ラツパによって裁きを執行する姿であります。

そして、銀のラツパが民数記 10 章に二つ登場しますが、イスラエルがシナイ山から旅を始めるときに、会衆を召集し、旅を始めるために呼びかけるためのラツパです。また、主への祭りの時にも、吹き鳴らされます。実際、レビ記 23 章には、秋の祭りの一つに、「ラツパを吹き鳴らす日」があり、そのときに人々はヨム・キプール、つまり贖罪日まで断食をしたり、悔い改めの時とします。そして銀のラツパは、自分たちを襲う侵略者への戦いに出るときに使われます。

この地上への災いは、この主の戦いを戦うという意味合いでのラツパの音でありましょう。角笛が吹き鳴らされる時も、先に言及したように、ヨシュアが率いるイスラエル軍がエリコを陥落させるとき、角笛を吹き鳴らして、それからときの声をあげると、エリコの城壁が崩れ落ちました。士師記では、ギデオンがイスラエル兵士三百人を連れて、ミデヤン軍を倒したとき、一人一人に角笛を吹かせました。サムエル記第一では、サウル王やヨナタンが角笛を吹き鳴らして、イスラエル兵士たちを呼び集めています。

そして預言書には、主がさばきを行なわれるとき、主が怒りを発せられるときに、ラツパを吹き鳴らしておられます。ヨエルの預言を見てみましょう。「2:1 シオンで角笛を吹き鳴らし、わたしの聖なる山でときの声をあげよ。この地に住むすべての者は、わななけ。主の日が来るからだ。その日

は近い。やみと、暗黒の日。雲と、暗やみの日。」とあります。主の日において、角笛が吹き鳴らされます。続けて読むと、「2:2 山々に広がる暁の光のように数多く強い民。このようなことは昔から起こったことがなく、これから後の代々の時代にも再び起こらない。」、さらに 4 節には「その有様は馬のようで、軍馬のように、駆け巡る。」とあり、次回学ぶ黙示録 9 章の内容になっています。ですから、主の日において、万軍の主と呼ばれる神が、御使いによってこの地上に制裁を加えられるのです。

ところで、テサロニケ人への手紙第一の 4 章には、有名な携拳の預言があります。そこにもラッパについて書かれています。「4:17 主は、号令と、御使いのかしらの声と、神のラッパの響きのうちに、ご自身天から下って来られます。それからキリストにある死者が、まず初めによみがえり、次に、生き残っている私たちが、たちまち彼らといっしょに雲の中に一挙に引き上げられ、空中で主と会うのです。」これは、主が戦われるためのラッパではなく、キリストのうちにある死者や生き残っている私たちに、引き寄せて、ご自分のみもとに集められるためのラッパです。ちょうどイスラエルが、銀のラッパの音を聞いて、集まって、旅を再会するように、私たちがキリストのうちにある者はみな、神のラッパの音によって一挙に引き上げられ、空中にまで降りてこられたキリストのみもとに集められます。けれども黙示録 8 章では、主が戦われるためのラッパです。

2B 金の香壇 3-5

3 また、もうひとりの御使いが出て来て、金の香炉を持って祭壇のところに立った。彼にたくさんの香が与えられた。すべての聖徒の祈りとともに、御座の前にある金の祭壇の上にささげるためであった。4 香の煙は、聖徒たちの祈りとともに、御使いの手から神の御前に立ち上った。5 それから、御使いは、その香炉を取り、祭壇の火でそれを満たしてから、地に投げつけた。すると、雷鳴と声といわずと地震が起こった。

先ほどの七人の御使いとは異なる、もうひとりの御使いが来ています。このパターン、様式は、7 章における御使いの動きでもそうでした。四人の御使いが地の四隅に立って災いを押さえ、そしてもうひとりの御使いが、生ける神の印を持ってやってきています。ここでは、この御使いは、金の香炉を持っていて、祭壇の所まで来ています。そして、祭壇の火でその香炉を満たして、香が焚かれます。その煙を神の御前に持っていき、それから、再び祭壇に戻ります。香炉に火を満たしてから、地に投げつけました。すると、「雷鳴と声といわずと地震が起こった」とあります。

主は、イスラエルの民をエジプトから連れ出して、シナイの荒野においてホレブの山のほとりで、ご自分の律法を与えられました。その時に、「山の上に雷といわずと密雲があり、角笛の音が非常に高く鳴り響いた」と先ほど読みましたが、神の聖なる姿を栄光の雲が満ちています。主が律法を与えられた後に、アロンとその息子たち、また長老たち七十人をモーセは引き寄せました。そして、すところこう書いてあります。「24:10 そうして、彼らはイスラエルの神を仰ぎ見た。御足の下には

サファイヤを敷いたようなものがあり、透き通っていて青空のようであった。」そうです、天における主のお姿が僅かにそこで見ることができました。そして主はモーセのみを山に上らせて、啓示を与えられました。それが幕屋であります。契約の箱から始まり、その上に載せる贖いの蓋、そして備えのパンの机、燭台、幕屋の幕、支える板、その板のための棒、そして聖所と至聖所を仕切る垂れ幕を教えます。その至聖所の垂れ幕の所に、香を焚くための香壇があります。そして外庭には、青銅の祭壇があります。また祭壇と聖所の間に、手足を洗うための洗盤もあります。そして外庭には東に門があり、その門の垂れ幕にはケルビムが織ってあり、同じように聖所への入口にも、また至聖所への入口にもケルビムが織ってあります。

主はシナイにおいて、イスラエルの民にご自分の天における栄光を地上でお見せになったのです。「ヘブル 8:5 その人たちは、天にあるものの写しと影とに仕えているのであって、それらはモーセが幕屋を建てようとしたとき、神から御告げを受けたとおりのものです。神はこう言われたのです。「よく注意しなさい。山であなたに示された型に従って、すべてのものを作りなさい。」」天における実体を、地上において模型で表していました。私たちは、幕屋であるとか神殿であるとか、そしてそこで行われるいけにえであるとか、なかなか馴染みが出ないものです。けれども、「何々をしなければいけない」という命令については、注目されて、そこに焦点が当てられます。しかし聖書の中心は、神の栄光です。そしてキリストが流された血によって示されている神の栄光が前面に出ています。自分が神に対して何をする以上に、神がキリストにあって何をしておられるのか、ということが中心に描かれています。

そして、ここの御使いの行なっていることは、大祭司が年に一度、至聖所の中に入る贖いの日、ヨム・キプールのことを思い出させます。レビ記 16 章に書かれていますが、大祭司が、自分のための罪のいけにえを捧げます。それからイスラエルのための罪のためのいけにえを、ささげます。その血を至聖所の中にまで入り、贖いの蓋の前で振りかけて、罪の贖い、罪の清めを行なうのですが、至聖所に入るときに香の煙を焚くのです。「16:12-13 主の前の祭壇から、火皿いっぱい炭火と、両手いっぱいの粉にしたかおりの高い香とを取り、垂れ幕の内側に持つてはいる。その香を主の前の火にくべ、香から出る雲があかしの箱の上の『贖いのふた』をおおうようにする。彼が死ぬことのないためである。」この大祭司のしていることは、永遠の罪の清めを成し遂げられた、キリストを指し示しています。ご自身の血を携えて、天の聖所に入り、そこで聖所を清めてくださり、聖徒とされた者たちが、天の中に入ることができるようにしてくださいました。そして、今も恵みの御座に、私たちが信仰によって大胆に近づき、憐れみと助けを受けることができるようにしてくださいました。

そして、ここで御使いは、「すべての聖徒の祈りとともに」香が捧げられています。この祈りとは何でしょうか？それは、5章8節に、四つの生き物と24人の長老が香のはいった金の鉢を持ってきて、小羊の前にひれ伏したとありますが、「その香は聖徒たちの祈りである」とあります。そして、6

章において、第五の封印が解かれたとき、祭壇の下にいたたましいのことを思い出してください。彼らは、「6:10 聖なる、真実な主よ。いつまでさばきを行わず、地に住む者たちに私たちの血の復讐をなさらないのですか。」と言いました。これら聖徒たちの祈り、地にさばきを行なってくださいという祈りが、今、神の御前に立ち上っているのです。そして 7 章に、大患難から救い出された彼らの姿を見ることができました。したがって、8 章からは、地に残されている人々、福音を拒んだ者たちに対する神の怒りが現れているのです。

ここから私は、次のペテロ第一の言葉を思い出します。「1ペテロ 1:17 また、人をそれぞれのわざに従って公平にさばかれる方を父と呼んでいるのなら、あなたがたが地上にしばらくとどまっている間の時を、恐れかしこんで過ごさない。」畏れかしこむことです。私たちは主を畏れかしこみ、福音を拒んでいる頑なな心、神に反逆している世について執り成して、祈るべきです。アブラハムがちょうど、主からソドムを滅ぼすと言われた時にそれでも待つてくださいと執り成したように、また、実を結ばない無花果の木を主人が切り倒そうとした時に、園の番人が執り成したように、です。「ルカ 13:8-9 番人は答えて言った。『ご主人。どうか、ことし一年そのままにしてやってください。木の回りを掘って、肥やしをやってみますから。もしそれで来年、実を結べばよし、それでもだめなら、切り倒してください。』」

そして、「御使いは、その香炉を取り、祭壇の火でそれを満たしてから、地に投げつけた。すると、雷鳴と声といわずまと地震が起こった。」とあります。祭壇というのは、神の裁きを表しています。そこで火がくべられるということは、火による裁きです。使徒ペテロは、ノアの時代の水による裁きのことを話した後に、こう言いました。「2ペテロ 3:6-7 当時の世界は、その水により、洪水におおわれて滅びました。しかし、今の天と地は、同じみことばによって、火に焼かれるためにとっておかれ、不敬虔な者どものさばきと滅びとの日まで、保たれているのです。」

2A 投げ込まれた香炉 6-13

1B 三分の一の破滅 6-12

1C 地 6-7

6 すると、七つのラッパを持っていた七人の御使いはラッパを吹く用意をした。7 第一の御使いがラッパを吹き鳴らした。すると、血の混じった雹と火とが現われ、地上に投げられた。そして地上の三分の一が焼け、木の三分の一も焼け、青草が全部焼けてしまった。

第一の御使いによるラッパは、「血の混じった雹と火」をもたらしました。同じく出エジプト記にて、主がエジプトの国をさばかれるとき、雹の災いをもたらされています。「9:23-25 モーセが杖を天に向けて差し伸ばすと、主は雷と雹を送り、火が地に向かって走った。主はエジプトの国に雹を降らせた。雹が降り、雹のただ中を火がひらめき渡った。建国以来エジプトの国中どこにもそのようなことのなかった、きわめて激しいものであった。雹はエジプト全土にわたって、人をはじめ獣に至る

まで、野にいるすべてのものを打ち、また野の草をみな打った。野の木もことごとく打ち砕いた。」とあります。同じような災いをもって、今、主は全世界をさばかれています。

黙示録にある記述を見ると、「これは文字通り起こらないだろう。」とする人たちがよくいます。聖書を信じていない人であれば仕方がないのですが、しかし信じている人であれば、主がかつてエジプトに同じような形で行われていたのです。むしろ、時代が変わるのです。新約時代においては、「今は恵みの時、今は救いの日(2コリント 6:2)」とあるように、神は悪い人にも良い人にも、同じように太陽を上らせ、雨を降らせてくださっています(マタイ 5:45)。しかし主は、教会を取り去られて、ご自分の救いの働きを完成に向けて進められるのです。イスラエルにかつて行なってくださったこと、そして神の福音を拒んだパロに対して行なわれた災いを、全世界的に福音を拒むこの世に対して行なわれるのです。

「地上の三分の一が焼け、木の三分の一も焼け、青草が全部焼けてしまった。」とありますが、主はご自身の天地創造において造られた秩序の一部、壊されます。三日目に、下にある水を分けて乾いたところとし、その乾いたところを陸と名づけ、水を海と名付けられました。そして陸において、種を生じる草や木をお与えになりました。そしてそこから取れる実を食べることによって人は生きるようにされました。そこで、ここの「木」は、実を結ばせるところの木としての言葉が使われています。しかし、これらが神から来ているということを受け入れない、その根本的な罪があります。「ローマ 1:20-21 神の、目に見えない本性、すなわち神の永遠の力と神性は、世界の創造された時からこのかた、被造物によって知られ、はっきりと認められるのであって、彼らに弁解の余地はないのです。というのは、彼らは、神を知っていながら、その神を神としてあがめず、感謝もせず、かえってその思いはむなしくなり、その無知な心は暗くなったからです。」それで、黙示録では、福音というのが創造主である神を認めよ、というもののなのです。「黙示 14:6-7 また私は、もうひとりの御使いが中天を飛ぶのを見た。彼は、地上に住む人々、すなわち、あらゆる国民、部族、国語、民族に宣べ伝えるために、永遠の福音を携えていた。彼は大声で言った。「神を恐れ、神をあがめよ。神のさばきの時が来たからである。天と地と海と水の源を創造した方を拝め。」

2C 海 8-9

8 第二の御使いがラツパを吹き鳴らした。すると、火の燃えている大きな山のようなものが、海に投げ込まれた。そして海の三分の一が血となった。9 すると、海の中にいた、いのちのあるものの三分の一が死に、舟の三分の一も打ちこわされた。

第二の御使いのラツパもまた、火による裁きです。「火の燃えている大きな山のようなもの」とあります。大きな山とは言っていません、山のようなものです。ヨハネは、天における幻を自分の知っている言語の表現で何とか表現しようと努力しているのですが、何にも当てはまっていなかったようで、「ようなもの」となっています。

この海に対する災いは、エジプトに下った十の災いで、第一の災いを思い出します。ナイル川が血になるというものでした。ここでは海全体の三分の一が血となりました。そして、地上へのさばきでは、植物の生命体が滅ぼされましたが、ここでは海洋生物が滅ぼされています。また、海上の舟も三分の一が滅ぼされています。このことによって、人々の食生活に対して、陸上だけでなく、海上のものが破壊されることによって断たれてしまいます。それだけでなく、海上の船はあらゆる商業が発達しているのですから、それが壊されるということは根本的な生活基盤の破壊を意味しています。

3C Ⅲ 10-11

10 第三の御使いがラッパを吹き鳴らした。すると、たいまつのように燃えている大きな星が天から落ちて来て、川々の三分の一とその水源に落ちた。11 この星の名は苦よもぎと呼ばれ、川の水の三分の一は苦よもぎようになった。水が苦くなったので、その水のために多くの人が死んだ。

第三の御使いによるラッパは、「たいまつのように燃えている大きな星」がもたらされました。これは、天使が「星」と呼ばれることがたくさんありますが、ここでは、文字通りの星でしょう。

「苦いよもぎ」とありますが、これは実際にある植物の名前です。ネットにはこう書いてあります。「ヨモギに似ていますが、葉がヨモギよりも細く、白っぽい感じで、7～8月に黄色い小さな花をつけます。…現在では多くの国で、製造販売が禁止されています。理由は、ニガヨモギの精油成分が神経系に作用して精神障害をおこす危険があるからだそうです。…ニガヨモギに含まれるツヨン(thujone)という物質がマリファナの有効成分のTHC(tetrahydrocannabinol)に似た化学構造を持っていて、人々を常習、幻覚、錯乱、痙攣、更には狂気や自殺に駆り立てるそうです。」¹人を狂わせ、死なせるような要素を持っています。そしてエレミヤ書には、実際に苦よもぎによる神のさばきが書かれています。「それゆえ、万軍の主は、預言者たちについて、こう仰せられる。『見よ。わたしは彼らに、苦よもぎを食べさせ、毒の水を飲ませる。汚れがエルサレムの預言者たちから出て、この全土に広がったからだ。』(23:15)」同じように今、苦よもぎによる毒の水で、多くの者が死にました。

興味深いことは、今のウクライナ、かつてのソ連であったところで、チェルノブイリにあった原発が爆発しました。そのウクライナ語の地名は、「苦よもぎ」という言葉です。この災いを指し示すような前兆的な出来事でありました。放射能の汚染というのが、私たち人類に根本的な脅威をもたらしていますが、患難時代においてはそれが全世界の三分の一というレベルで起こります。

4C 天 12

こうして地上の三分の一、海の三分の一、そして水源の三分の一がだめになりました。次は、天

¹ <http://www.page.sannet.ne.jp/mahekawa/nigayomogi.htm>

界において三分の一に災いが下ります。

12 第四の御使いがラツパを吹き鳴らした。すると、太陽の三分の一と、月の三分の一と、星の三分の一とが打たれたので、三分の一は暗くなり、昼の三分の一は光を失い、また夜も同様であった。

第六の封印が解かれたとき、太陽が黒くなり、月が赤くなる災いがありましたが、ここでも光が失われる災いです。前回は、天からの星が地上に落ちたことによって、土地のちりが舞い上がることによる現象であったかもしれませんが、ここでは実際に、太陽と月と星の光源が三分の一に低下しています。天地創造の第一日目の光、そして第四日目の太陽、月、星に対して、ご自身でその秩序を壊しておられます。そして、この災いもまたエジプトに災いが下った時と似ています。九つ目の災いが暗やみでしたイスラエルの住んでいるところは光がありましたが、そこ以外は三日間、真っ暗になりました。同じように主は終わりの日も、暗やみによってさばかれます。主の日は、「暗黒の日」と呼ばれています。先ほど引用したヨエル書に、主の日は暗黒の日であるとありました。

聖書は、暗闇と光の対比によって、前者が罪、また神に反逆する世、また神の怒りを表している世界を示しています。光は正義や真実、神ご自身のおられるところ、また癒しや平安をも表しています。再臨のキリストは、マラキ書で「義の太陽」と呼ばれ、イザヤ書には太陽や月の光が七倍にまでなると書かれています。イエス様は、ヨハネによる福音書でしきりに、ご自身が世の光であり、光のあるうちに光を信じなさいと言われました。「ヨハネ 12:35-36 まだしばらくの間、光はあなたがたの間にあります。やみがあなたがたを襲うことのないように、あなたがたは、光がある間に歩きなさい。やみの中を歩く者は、自分がどこに行くのかわかりません。あなたがたに光がある間に、光の子どもとなるために、光を信じなさい。」ですから、文字通りの光が少なくなり、人の命の根源、命の支えとなっている光を一部取り除かれていると同時に、霊的な意味、罪の中にあなたは生きているのだよ、という裁きがあります。

そして、この四つの災いを見ると、全てが「三分の一」となっていました。言い換えれば、三分の二は残っているのです。主は実は、この災いにおいても憐れみを示しておられます。忍耐深くあられます。人々が悔い改め、救われることを願っておられます。それが分かるのは、その後の話です。9 章の終わりに、こうした災害を受けてもなおのこと、悔い改めないでいる者たちがいることをヨハネは書き記しています。そして 16 章においては、さらに究極の太陽や暗闇による裁き、海や川の源に対する裁き、つまり残りの三分の二にも災害をもたらすのですが、「16:9 しかも、彼らは、これらの災害を支配する権威を持つ神の御名に対してけがしごとを言い、悔い改めて神をあがめることをしなかった。」とあるのです。これはまさに、心を頑なにしたパロを思い出させるものであり、彼もまた、神の忍耐を軽んじて心を頑なにさせた者でした。「9:15-16 わたしが今、手を伸ばして、あなたとあなたの民を疫病で打つなら、あなたは地から消し去られる。それにもかかわらず、わた

しは、わたしの力をあなたに示すためにあなたを立てておく。また、わたしの名を全地に告げ知らせるためである。」主は、たとえ最後まで悔い改めないことを初めから知っておられても、それでも忍耐を示しておられるのです。

私たちは災いが起こる時に、絶えずこんな疑問を神に投げつけます。「神は、なぜこんなひどい災いを人に与えられるのか？」例えば、東日本大震災で二万人以上が津波で亡くなりました。けれども逆に問いたい、日本には一億二千万以上の人たちが住んでいますが、彼らはまだ生き残っているのです。「なぜ、これだけの人々が未だ生かされているのか？」ということなのです。神は敢えて、この秩序を保っておられるから今、こうなっているのです。「コロサイ 1:16-17 なぜなら、万物は御子にあって造られたからです。天にあるもの、地にあるもの、見えるもの、また見えないもの、王座も主権も支配も権威も、すべて御子によって造られたのです。万物は、御子によって造られ、御子のために造られたのです。御子は、万物よりも先に存在し、万物は御子にあって成り立っています。」

2B なお三つのわざわい 13

13 また私は見た。一羽のわしが中天を飛びながら、大声で言うのを聞いた。「わざわいが来る。わざわいが、わざわいが来る。地に住む人々に。あと三人の御使いがラッパを吹き鳴らそうとしている。」

第四のラッパまで見ましたが、あと残りの三つの災いがいかにひどいかを予告しています。「わざわいが来る。」と三回叫んでいますが、それは一つ一つの災いを叫んでいるからです。ここを「御使い」と訳している聖書もありますが、「わし」と「御使い」のギリシヤ語が似ているそうです。けれども、セラフィムやケルビムは、翼があり、驚であってかつ天的な存在、御使いのような存在であることは十分に考えられます。

このように火による災いが始まりました。そこで読みたいのは、そのペテロ第二の手紙です。「3:8-9 しかし、愛する人たち。あなたがたは、この一事を見落としてはいけません。すなわち、主の御前では、一日は千年のようであり、千年は一日のようです。主は、ある人たちがおそいと思っ
ているように、その約束のことを遅らせておられるのではありません。かえって、あなたがたに対して忍耐深くあられるのであって、ひとりでも滅びることを望まず、すべての人が悔い改めに進むことを望んでおられるのです。」まだ、私たちはこのような災いが下るのを見ていません。それは、神の御心があるからです、ひとりでも悔い改めて滅びから免れるためです。その忍耐を思って、私たち自身も悔い改め、そして周りの人々が悔い改めることを祈り求めて行きましょう。